

瀧夜叉

皆川博子



瀧夜叉

皆川博子



皆川博子（みながわ・ひろこ）

1985年、「壁一旅芝居殺人事件」で日本推理作家協会賞、86年、「恋紅」で直木賞、90年「薔薇忌」で柴田錬三郎賞受賞。著書に、「二人阿国」「化蝶記」「妖櫻記」「骨笛」ほか多数。

たぎやしゃ
瀧夜叉

一九九三年二月二〇日 印
一九九三年二月五日 発行 刷

著 者 皆 川 博 子

編 集 人 吉 田 俊 平

発 行 人 田 中 正 延

発 行 所 毎 日 新 聞 社

●一〇〇一五 東京都千代田区一ツ橋

●五三〇一五 大阪市北区梅田

●八〇二 北九州市小倉北区紺屋町

●四五〇 名古屋市中村区名駅

書籍営業部〇三(三三二二)三三三七
第一図書編集部〇三(三三二二)三三三九

印刷 凸版印刷

製本 大口製本

落丁・乱丁本は小社でおとりかえします。

© HIROKO MINAGAWA Printed in Japan 1993

ISBN4-620-10489-2

瀧
夜
叉

装画·装帧

村上
昂

卷之一

富士が、火を噴いた。

黒潮は列島にそって滔々と流れる。大洋を切り裂く一すじの激しい大河である。紀伊より西では上り潮、東では下り潮と呼ばれる。雅びに桔梗水とも呼ばれるのは、黒みを帯びるほど深い色のゆえだ。

噴煙が空を濁らせ山肌を炎の龍が這い下る富士を遠見に、網代帆の船が、下り潮にのって、東国を目指す。

本帆と弥帆、二枚の帆が向かい風を巧みに間切る。

潮流と風の助けを借りた船脚は速い。四国伊予の日振島を発してから、時化にもあわず、外海を帆走してきた。

風が風げば、両舷あわせて十八挺の櫓が、えいえい、えいさらえい、と櫓拍子にのって、波を切る。

承平七年。

廢太子早良親王の怨靈を懼れ桓武帝が都を長岡京から平安京に遷してより百四十余年。遣唐使を廢止した菅原道真が右大臣から大宰権帥に左遷され大宰府で憤死してから四十数年後。私營田、莊園の経営が盛んになり、律令制は崩壊の度を速めつつある。

四国から紀伊南端、鳥羽、伊豆、安房、と東進し、そうして上総の東岸に沿って北上する航路は、官船は通らない。公には、東国と都を結ぶのは、陸路に限られている。しかし、海を根城とするものたちは、必要があれば、水路を自在に行き来する。

軟弱な官船は、風波が荒ければすぐに何日も津泊まりし、陸に寄り添うように櫓漕ぎし、しか

も夜は泊まりと決めているので、せっかく道しるべとなる星を利用できず、たかが土佐から難波まで五十数日もかけたりするが、彼らは、弥帆によって逆風を利用し瀧つ瀬のようだと恐れられる下り潮を制御し、星を目当てに夜も航海するすべを、心得ていた。

赤銅色の水手^{かみ}たちにまじって、二人の少年が艦^{くわい}にくつろいでいる。

主の九郎直純は十二歳、したがう美丈丸^{ひじょうまる}は十五歳。

九郎直純は出立の直前に元服をすませ名乗りをあらためたが、美丈丸はいまだに童形^{どうぎよう}である。しかし、体軀は美丈丸のほうが見るからにたくましく大人びている。

綱^{はな}の綱の束をよりあわせたような引き締まった足首だ。九郎は時折、ぼうつと美丈丸にみとれていることがある。凛^{りん}と張った眉の下にくつきりと彫られた眼も、少し鼻翼の張ったがっしりした鼻も、名のとおり美しく猛々しいと、九郎は思っている。眼もとの涼しさを、唇が裏切る。ぼつとりと厚みのある紅い唇である。

船を宰領^{さいりやう}するのは、彼の叔父である。他に、従者四人、水手二十人。水手はすべて、船軍^{ふねいくさ}となれば、武器も取る。

さらに、舳先^{へさき}に、一人の少年がうずくまっている。

くしけずったことのないような蓬髪^{ほうはつ}が膝まで垂れて顔を隠し、身にまとった水干は、もとは白かったのだろうが、鼠の皮のような色にかわり、あちらこちら破れている。手足をおおった垢^{あか}は昔のようだ。ほとんど身動きしないので、夕陽を浴びた逆光の中だと、光背をもった古びた木像か何かのように見え、九郎は何だかぞくぞくとしたのだった。

へじさい」と呼ばれている。

「見ろ、見ろ、あれが富士という山だ」

水手の一人が指差し、美丈丸に話しかけている。潮風にさらされぬいてきた胸間声だ。

「おれは、何度もこの水路を行き来しているが、富士があんなに烈しく火を噴いているのは初めて見た」

「波がひととき荒いのは、富士のお山が怒っているせいかな」
他の水手が応じる。

美丈丸の返事はない。美丈丸は、よほど気が向かなければ、相槌あいつちもうたない。

「地の底に閉じ込められた龍王が、天に駆け登ろうとしている」と、他のものが言う。

「これ以上荒れねばよいが」

「おれたちの船には、へじさい」がいるから」と、水手が、舳先はつせんにうづくまる姿を顎でさして、言った。「いざとなれば、あれが、いる。心丈夫なことだ」

九郎には、水手たちは、あまり話しかけない。子供ではあっても主なので、いささか氣づまりなのだろう。九郎が美丈丸以上に口数が少ないせいもあるのかもしれない。

心細さと淋しさが、九郎の口をいっそう重くする。

「あれが、いる」と言われたへじさいに、九郎は目を投げる。

この船にのって、はじめて、九郎はその蓬髪ほうみの少年を見た。

彼より後から、危なっかしい足どりで船にのりこんできた。そうして、だれとも口をきかず、舳先にすわり込んだ。水手たちにしたところで、身だしなみがよいわけではない。乱髪の根を荒縄あらなわでくくり、夏なら半裸、初冬のいまは布子をまとってはいるけれど、それも鉤裂かぎさきやほつれを荒っぱくつくろった、裾の破れたしろものだ。だが、へじさいには、彼らにはない異様な薄汚さがまといついていた。

長く垂れたそけ髪が顔をかくしているのも、九郎には不気味に感じられた。

九郎が意外だったのは、美丈丸がへじさいに親しい態度をみせたことだ。知り合いのようで

あった。何度も同じ船に乗ったことがあるのかもしれないと、九郎は思った。

彼の叔父も従者らも、そうして水手らも、不潔なへじさいをさげすんではいけないようだった。むしろ、うやうやしく見える態度さえとり、水も食べ物も、へじさいにだけは、十分に与えられている。

へじさいは、文字で書けば「持衰」なのだと、航海のあいだに、彼は、叔父から教えられた。

「船旅のあいだの災いを、すべて、になう役目の者だ」昔、遣唐船は、と、叔父はつづけた。「かならず、持衰をともなった。嵐に遇ったとき、持衰を海神に捧げれば、海はしずまる。官船の訪唐は絶えたが、おれたちは、長い船旅には持衰を乗せる」

船をとりまく外洋は、彼が育った瀬戸の南海とは、色も荒さも、まったく異なる。

内海の航海もけっして楽ではない。点在する島々のあいだを奔る潮は、渦巻き逆巻き、岩礁が船底を噛む。しかし、時刻によって変わる潮流の向きも、岩礁のありかも、五つの年から船を家として過ごしてきた九郎には、親しいものだった。生まれたのも、伊予の、内海をのぞむ屋形である。

しかし、見渡すかぎり海原という航海は、初めてのことだ。常に、左手に陸地をのぞみながらではあるけれど、その陸は、遠く、淡く、かすかだ。

——東国の涯に、わたしは捨てられる……。

思うまいとしているのに、九郎は、また、そう感じた。口に出して訴えることはできないし、そんなはじめなことを考えてしまう自分が腹立たしくもある。柔弱なのは都の女の腹から生まれたゆえだと、亡母までがそしられよう。ことに船を宰領する叔父には、知られたくなかった。心から追い払うようにしているのだが、ふとしたはずみに、じわりと滲み出す。

十三年前、大宰府に下る官人の船が、伊予灘で賊船に襲われた。

賊は、財物と女を手に入れた。首魁^{しゅがい}は、犯した女を、海を見下ろす屋形に住ませた。そうして、彼が生まれた。

彼は、母の手もとで育った。三歳のとき母が病死した。彼は、入江^{いりえ}に屯^{たもつ}する家舟^{えぶね}の一つにあずけられた。そう、彼は聞いている。

老いた夫婦の住む舟であった。老婆の甥の一家がやはり家舟を住まいにしており、美丈丸はその舟で働いていた。美丈丸の素性は知らない。幼いとき、労働力としてどこから買われてきたとか攫^{さら}われてきたとか、ちらと耳にはさんだおぼえがあるが、確かめたことはなかった。

年は二つしか違わないのだが、美丈丸は、九郎の目に、いつも、はるか年長に見えた。泳ぎも、漁^とりも、美丈丸のしぐさを見ならっておぼえた。親切な相手ではなかった。ろくに口をきいてくれるでもなし、まといつくと、うるさがった。舟から舟へ、そうして、岩から岩へ、苦もなく飛びうつる美丈丸をまねて、彼は足を踏みはずし、しばしば水に落ちた。美丈丸は気まぐれだった。気がむけば助け、知らぬ顔で見捨てることもあった。たびたび溺れかけ、幼いころ、彼は水を嫌った。溺死をまぬがれ、水練の達者になれたのは、よほどわたしは運が強いかもしれないと、後に彼は思ったりした。

もっとも、美丈丸は、幼い子の相手をして遊んでいる暇などは持たないのだった。

大人にまじって漁をし、難破船があれば、これも大人たちといっしょに、積荷を引上げ、溺死者の衣服を剥いだ。ようやく岸に泳ぎつきまだ辛うじて息のあるものを、叩き殺し獲物を手に入れるのも、大人たちといっしょだった。殺さず、人質にして、その郷里から財物を取り寄せさせることもあった。そういうのはからい、大人たちが判断した。

そうして、彼らは、積荷ゆたかな船が通れば、群^{はら}れをなして、襲いもした。

東は明石、東南は由良・鳴門、西は早瀬^{はやせ}、西南は速吸^{はやすい}、それぞれ、流れの激しい瀬戸によって

さえぎられた内海には、おびただしい島が散在し、官物をはこぶ船や交易の商船が行き交う。

襲う集団は瀬戸内に無数にあり、その頭は、魁帥かざうと呼ばれる。彼の父は、魁帥三十以上を掌握する大魁帥だというのが、彼は会ったことはなく、指令が来て、家舟がいつせいに漕ぎ出すのを見送るばかりだった。陸に住まいを持つものも、父の配下には数多くいた。漁をし、雇われれば荷を運ぶ船の水手をつとめもした。水手であると同時に、掠奪者にもなった。他国の津、浦に漕ぎわたり、国衙こくが——各地におかれた国の役所——を襲い、火をはなち、財物を奪った。

美丈丸は十をすぎると、船軍に加わった。矢傷刀傷の痕が、美丈丸の肩や背に数を増した。

入江では、船の建造も盛んだった。奥深い山中で伐り出した楠の太木を川に流し、河口でせきとめる。くり抜いて、船底にする。楠は堅牢で、根本は太く、船体に適しているけれど、長い材がとれないので、二本とか三本とか、つなぎあわせ、横梁をわたし、さらに、梁と船底のあいだの隙間に太い直材を門かどぎのようにとおして強化し、舷側板を両側に上開きにとりつける。この造船法で、上甲板に相当する部分が、現代の列車の車両一台分の床面積にほぼひとしい大船も造ることができた。伐採や造船の作業には、かつて遠い奥羽から連れてこられたへ俘囚へいゆうの裔すえも、多く使われていた。

潮のにおいに、楠を焼くにおいがまじってただよい、手斧ちようなでえぐられた木屑が、岩の隙間を埋めていた。

瀬戸内を航行するだけならこんな大船はいらないけれど、東国や陸奥との往来には、外洋の荒波に負けない船を持たねばならぬ。遣唐使が廃止になって、官の巨船は需要がなくなつた。莫大な費用がかかるから、民間では、巨船はおいそれとは造れない。唐から学んだせつかくの技術も、すたれつつあった。

老いた夫婦は彼に飢えないだけの食べ物あてがってくれたが、それ以上の世話はやかなかつ

た。かくべつ情が薄いわけではなく、家舟に住む幼い子らはどれも同じような扱いを親から受けていた。

元服前に、彼は一度、官船襲撃にともなわれている。養い親は、護符を彼の首にかけた。養い親は老齡なので残り、彼は美文丸が乗る家舟に同乗させられた。

家舟は、夫婦家族ぐるみ、強奪にくわわる。大宰府からのぼってくる官船の行く手を、小舟の群れは阻んだ。

彼らが矢を射かけると、船は止まった。鉤のついた縄を船べりに投げ、引きよせ、いっせいに乗りこむ。女らは家舟に残るが、これも弓矢と太刀は離さない。拔身をかざした美文丸の背が、彼の視野を占めた。血しぶきと怒号に、彼は包まれた。官船の水手は彼らに加勢し、刀を雇い主に向け、手負いの役人らを水に投げ入れた。

その翌日、使者が来て、彼は、日振島におかれた父の本陣に連れて行かれた。

父親の顔を見るのは初めてだと思ったが、彼は、既視感をおぼえた。たぶん、彼がまだものごころつかぬ赤子のころ、父は母のもとを何度かおとずれ、記憶の深い底に、その顔が残っていたのだろう。

数人の男たちが同席した。

「よく戦ったそうだな」

父のかたわらに座を占めた男が言った。

彼は、自分がよく戦ったとは思えなかった。きらめく刃、とぶ血潮に、なかば茫然とし、なかば、恐怖にふるえ、ただうろうろとしていたような気がする。後で見たら刀に血糊がついていたから、少しは斬ったのかもしれない。

元服したからには、もう子供ではない、と、男たちは口々に言ったが、彼は、いっこう自分が

変わった気はしなかった。

「東国へ行け」

父が彼に言ったのは、その一言だけであった。

二

東国の平野の西端は、太古、あずまの広潟と呼ばれ、外洋につながる大入江であった。

しだいに干上がり、湖沼地帯となった。この物語の当時、信太しだの流れ海と呼ばれた霞ヶ浦は、巨大な五指をひろげて陸地に食い込み、複雑な潟をなし、手首のようにせばまった河口の部分は阿是あぜの湖と呼ばれた。潟はるか西にもび、常陸と下総をわけける。常陸川、毛野川、子飼川、おびただしい川が平野に網目をつくり、川の一部はひろがって沼や広江となり、洪水のたびに流域を変える。

阿是の湖をはさんで、香取、鹿島、ふたつの神社の神人じんらが水上権を掌握している。すなわち関をもうけ、航行する船から財物をまきあげる。

下り潮の主流は、銚子の沖で東に方向を変える。潮にまかせては、船は大海のただなかに迷い出る。

九郎らの船は、潮に濡れた網代帆をおろし、帆柱を倒した。櫓漕ぎに変えて、陸に近づいた。

阿是の湖の河口の付近は、大小の岩が屹立し、高波が轟とうちあたり、視野は白い飛沫しぶきの幕におおわれる。

とりわけ巨大な岩が二つ、関門のようにそびえ、航行をはばむ。

その手前の小島に、九郎は目をとめた。

島全体が、うごめいているように見えたのだ。ときどき、小さい黒い影が、岩上から海に落ち

る。みずから飛び込んでいるようにも見える。九郎は手をかざして陽をさえぎり目をこらし、奇妙な生きものが島を埋めているのだと、みとめた。

ひとときわ高い岩の上に、大きいのが一匹、腰を落として坐り、首を空にのばしている。黒く大きく、耳のない犬とも、濡れそぼった鳥ともつかぬ姿だ。

船が近づくと、それはクォーと吼えた。仲間に危険を伝えたのだろう。群れは、いっせいに、海に飛び入った。

「海獺あしかというものだ」

と、水手が美丈丸に教えた。

「魚なのか。獣なのか」

美丈丸はたずねた。

九郎も好奇心を持ったが、水手は、さあ、と、わからぬふうで、

「だから、あの島をへあしか島」というのだ」

と、自分の言いたいことだけを言った。

「紀伊の大引浦の沖の島にもいるぞ。紀伊のは、あれより大きい」

ぬめぬめした頭が、点々と波間に浮き沈みする。

「東国の海夫かいふは、あれを食う。皮で馬具をつくる」

あしか島を過ぎ、河口の巨岩の前で、船は木の叉に石を抱かせた楔くさびがた型の碇を二つ、海中におろした。

「河は、船底がつかえて、大きい船は進めない」

水手は九郎に教えた。

水手のひとりが、ぼうぼうと大角はちのふえを吹き鳴らした。切り立った岩崖の上にそびえる矢倉に、

物見の姿が見えた。九郎らの船をみとめたのだろう、大角の音が返ってきた。

それと同時に、小舟が十数艘、漕ぎ寄ってきた。小舟の群れは河口をふさぎ、草の楯の後ろに、鉄の小札をつらねた短甲をつけた男たちが弓に矢をつがえ、岸辺にも武装した男たちが群れた。

「藤原玄明殿の手の者か」九郎の叔父が、声をあげた。

「そうだ。おれらは香取神社の神人だ」

「早まるな。仲間だ。前伊予掾藤原三郎純友が男、九郎直純が、平将門殿の営所にまいる。おれは、純友が弟、高橋五郎伊友。案内をたのもう」

相手は即座に警戒を解きはせず、

「割符を見せろ」

野太い声を、潮風がはこんだ。

「矢で届けよう。楯で受けろ」

焼印を押した板片をおさめた布袋を鐏矢に結び、高橋伊友は美丈丸に手わたした。

舳先に立って、美丈丸は強弓につがえ、引きしぼった。盛り上がった筋肉が、陽を浴びて濡れたように光るのを、九郎は見た。

「矢合わせをするつもりはない」

笑い声を、高橋伊友は送った。

「挨拶だ」

轟音とともに、矢は空を裂き、雁股の鎌が楯に突き刺さった。

三

漕ぎ寄った小舟に、舷側に垂らした綱の結び目を足がかりに乗り移る。刀も弓矢も、小舟に乗